

# SAHIKA 201509



世は今、おとしブームに沸いている。

おとしというのは、居酒屋などで注文を受けた後に店が出す、ちょっとした一品のことだ。客を席に「おとしする」という意味合いや、注文を確かに通しましたという意味を持っている。

私はそんなおとしというものをあまり快く思っていない。店によっては拒否が出来ない、勝手に出されるのに料金が発生する、などがあるがそういうせせこましい理由ではない。私はいつだって自分の腹の調子と、食べるもの食べる分量を自分で決定したいのだ。

だというのに、どこの店もたかが流行に惑わされておとしを出し始めた。居酒屋だけではない。中華やフレンチ、果ては寿司屋やラーメン店でおとしが出てくる。ファストフードがおとし出し始めたらもうファストでもなんでもないではないか。しかし客も流行りにのってそれを楽しんでいる。最近では立ち食いおとしやおとし専門店も話題になっていた。馬鹿か。

私は今、暇つぶしがてらネットに転がっている小説などを読んでいた。今読もうとしているのは4人の作品の集まりで、小説は3本——。な、何だと!?

目次に小説があるではないか! 何だこれは。まさかおとしか、おとしなのか?

居間のテレビでは子供たちが番組を見ている。30分アニメのようだが、開始5分だけ別のアニメを放送していた。私はノートPCを閉じ、子供からリモコンを取り上げた。チャンネルを次々に変えていく。

『今事件の続報が入ってきました、の前におとしの情報です』

『佐藤投手、おとしから鋭い一球です。バッターは手も足も出ませんねー』

『新規法案の前のおとし法案が可決された模様です。本体法案の行方にも目が離せません』

『クックック、貴様らなど一撃で屠れるが、まずはおとしの一撃だ!』

こ、これが大おとし時代……。いや、しかし所詮おとしはおとしのはず。大事なものは中身に違いない。

私はノートPCを開いた。そうだ、きっと目次のおとしより中身の方がいいはず!

私は小説を読み始めた。

「み、短い……」

# SAIHIKA201505

表紙：「寒迎」……鴉和	1
目次：SAIHIKA201505 おとし版……マウス	2
小説：	
哲学者「巡春秋」の怪気炎__概観……矢野ヒカル	3
君のいない世界はこんなにも素晴らしい 1…T.K	5
祭囃子と夜桜と……マウス	7
From Writers 最低限の光……矢野ヒカル	10

春秋は哲学者と呼ばれる事を嫌った。彼にとっての哲学とは片恋に等しいものである。これまでの人生を振り返っても恋などに縁はなく、ただひたすらに歩くだけだった。しかし、彼には夢がある。それはひどく哲学的な夢であり、この世に生まれし者は必ず思う疑問であった。

「はじまりはなにか？」

至極明快な問い。この世界は如何にして生まれたのか。生まれる前には何があったのか。子供の頃、誰しも思った問いであるが普通の人間は大人になるにつれ、「ふっふっふ、宇宙のはじまりはビッグバンで、その前には無があったのサ」などとのたまひ、この疑問を疑問と見れなくなっていくのであるが……。世界には哲学者なる子供心を忘れない非常に愉快的な人間がいる。彼らはこの疑問の問いを追い求める。そして求められた疑問は、

「はじまりはなにか？ そもそも、はじまりはあるのか？」

「はじまりはなにか？ そもそも、はじまりはあるのか？ さらにそもそも、この問いに意味はあるのか？」

などと姿を変え、「意地でも答えは教えてやらん」と昭和の頑固親父並の意地悪になっていった。しかし、ちゃぶ台返しされても「まあまあ、お父さん落ち着いて」といえるのが女の懐の深さであり「ならぬものはならぬのです」と言われても引き下がらないのが男の生き様である。一度疑った者は二度と戻れない、懐疑の道を歩むのみ。彼はこの問いの魅力に取り憑かれたどこにでもいる一人の哲学者である。前述のとおり彼は自らが哲学者と呼ばれる事を潔しとしない。

哲学者にて哲学者にあらず……男、巡春秋（めぐり しゅんじゅう）の物語。

とまあ、こんな感じで小説書いていこうと思ったけど、メ切に間に合いませんでした。というわけで、設定を書いていこうかなと。

・春秋の時間は未来から過去へ進む。

5月25日の25時59分の次は、5月24日の0時00分になるというわけですね。

・春秋は不老不死。

死ねません。何も食べなくても、首を切られても生きています。

”過去と未来が交差する点、現在。現在に生きるは人間。哲学者、巡春秋もその一人。明日から今日へと時が経つ例外。不老不死という例外。人は新奇なものを求める。されど知れ。新奇のみで成り立つものは、人の記憶に残らない。”

春秋は人の悩みを解決していきます。そして、なんやかんやあって恋心が芽生えたり芽生えな  
かったりするんですけど、存在自体がイレギュラーな春秋は誰の記憶にも残らないんですよ。  
HAHAHA

「はじまりはなにか？」という哲学的な問いは普通の人間には知り得ないが、春秋にとっては  
いつか辿り着く結論なんですよ。だから、片思いではなく、いつか叶うはずの愛情。

”実った恋は、恋と呼ばずに愛と成る。哲学は片思い。いずれ知るであろう真理など、哲学と  
は言い得ない。”

以上。

あとがき。

みんな。ごめん。

君のいない世界はこんなにも素晴らしい

TK

桜色の高校生活が始まり、同時に一人暮らしもスタートした。小うるさい親とさんざん俺の世話を焼いてくる姉のような妹からオサラバして、ついに俺は自由になった。

入学式が終わって、帰り道を歩きながら帰ったら何をしようか想いを馳せる。まだ引越しの荷物は片付いていないが、それを片っぴと終わらせてゲームやりたい放題テレビ見たい放題ネットサーフィンしたい放題薄い本見たい放題だ。自然と口から歌がこぼれる。ああ天国だ。俺の天国がもうすぐそこに来ている。

遠くにボロいアパートが見えてきた。そう、あれが我が城、竹田ハイツだ。大家さんが竹田さんというだけのシンプルなネーミング。いやそんなことはどうでもいい。

靴から鍵を取り出し、いざ楽園への扉を開く。

「扉開けたとたん、見知らぬ世界へと〜」

歌詞も相まって清々しい。風は俺の頬を撫ぜ、透き通るほど蒼くて雲ひとつない空が広がり、遠くまで続く青々とした草原と木々が揺れる。その向こうには大きな城がそびえ立ち、城下には町が栄えていて、壁は白く、カラフルな屋根が並び、ところどころ突き出た煙突から煙が昇っている。なんてファンタジー。

「ありえない」

靴が地面に落ちた。どうなっているんだ。どうしちゃったんだ俺の城。お前はもつとこう、質素で謙虚で日本の心を体現していたはずだ。お父さんはお前を本物の城になんて育てた覚えはない。

「どうか俺の家はどこだ？ いやここが俺の家なんだがこれじゃ入れねえ。

窓はきちんと全部閉めているし、このドア以外に家の中へ入る方法なんてない。じゃあ俺はどうやって家へ帰ればいいんだ。この日のために新作P.D.を買ったんだぞ！

「はあ……」

まじめに考えよう。まずドアを一度閉めてからまた開けてみよう。

ボタン。ガチャン。

透き通るほど蒼くて雲ひとつない空が広がり、遠くまで続く青々とした草原と木々が――。

わかった。ドアの開閉くらいじゃ俺の城が元に戻ることはない。それだけとはりあえずわかった。ならば次の手だ。

ポケットからスマホを取り出す。目の前の光景を撮影。こういうファンタジー

は写真に映ることはないというのが定石だと思っていた。映った。私はヨーロッパです、と自己主張する写真が一枚撮れた。

これをまず妹に送信だ。これを警察に届けたりネットに上げたりすることに俺のメンタルは耐えられない。相手が何を思うか想像に難くないし、それだけで嫌になる。だからまずは妹だ。俺は彼女を信頼してはいないが身内ならではの冗談で済ませられる可能性に大いに期待している。

さてそろそろメールが届いた頃だろう。電話をかけよう。

ピッピッピ。プルル。ガチャリ。

『もしもし？ お兄ちゃんから電話なんて珍しいね。というか初めてだよね。』

私嬉しいなあ。お兄ちゃんのほうが二つ年上だけど携帯買うときは一緒でお互い初めてのアドレス交換したんだよ。懐かしいなあ。ふふふ。私今日はお兄ちゃんの一人暮らしにお邪魔しちゃおっかな。なんて』

「悪いな、和花<sup>わか</sup>。俺の城はヨーロッパに陥落した」

『よろこばってメールできてたあの写真？』

「そつだ。家のドアを開けたらあの景色が広がっていたんだ」

『お兄ちゃん……素直に私に来て欲しいって言っているんだよ？ 私はいつでもお兄ちゃんの元へ駆けつけて何でもしてあげる！ でもさすがに光の速度は超えられないから三十分くらい待つ』

「待って待って。今すぐ待て。わかった。俺が悪かった。阿呆なことを言った俺が悪かった。冗談だ。写真はドイツのリヒテンなら城だ。別に家は何ともない。心配するな。だから来ないでくれ。頼むのとおりで」

『えーなにそれー』

電話の向こうで口をとんがらせているのがわかる。そんな声だ。

「俺は大丈夫だ。じゃあな。歯磨いて寝ろよ。風邪引くなよ」

プツツ。ツーツー。

どうやら俺に頼れる人はいないようだ。というより悪手だった。このままでは確実に和花は家へ来るだろう。それが一時間後になるか一ヶ月後になるかはわからないが、来たら「お兄ちゃん、あのお城と一緒に住もう！」となるに決まっている。

気が動転していた。誰かに聞いてもらいたかった。話題を共有して不安を少しでも取り除きたかった。全ては俺の弱さが招いたミスだ。家がこのままなら

近くの公園で野宿でもしようと思っていたが、やめた。あの城で妹と葬式を阻止するため、穂下<sup>ほした</sup>行次<sup>ゆきじ</sup>、いざ参らん。

〜次号へ続く〜

○あとがき

違うんです。サボってたわけじゃないんです。

すでにノートに授業中書きためた設定資料がたくさんあるんです。でも無駄に世界観とかいやもう言い訳見苦しいんで以上にします。

ふう。

T>「先月のSAINKAで、来月はたくさん書くと言ったな。あれは嘘だ」

T<「うわああああああああああ」

自分で追い込んでおいてこれなんだよなあ。まったく反吐が出るぜ。

というわけで来月は何卒。平に平に。と毎月言い続けるのもあれなのでとりあえず来月十ページ<sup>だいたい</sup>一万文字<sup>書けなかつたら</sup>SAINKAに原稿出すのやめます。#<sup>まとも</sup>に小説を書かなくなる。

なんかくつさいあとがきといい本編といい現在進行形で消えることのない黒歴史を生産していると思うと悲しい気分になってきますが、気にしていると小説なんてもう書いてないです。

では。また来月をお楽しみに。

……そもそも読んでる人いるんすかね。

静かな、というよりも活気がないと表現されそうな農村の入り口で、少女が一人、大きく叫んだ。

「寅が、寅が帰ってきたぞー！」

少年の帰りを聞いた者は大慌てで、農作業を放り出し駆けつける。次第に事を知った人々で村の入り口は埋め尽くされていった。

大人たちに囲まれ、慎ましい胸を張っている少女の名をあげざみと言う。

「本当かい？ あざみ、本当に寅が帰ってきたんだね？」

三角巾に前掛け姿の女が、皆の言葉を代弁してあざみに問いかけた。

「本当さ、本当だとも。なにせこの目で見て、話もしたんだからね」

「じゃあ、今は寅はどこに？」

「先に、お神参りに行っているんだ。直に村に来るぞ。みんな、歓迎の準備をしよう」

大人たちは頷いて、意気揚々と役割分担をして動き始める。皆駆け足で、祝いの席の準備をしていた。

活気を失った村を、一瞬でここまで奮い立たせる。そういう力が、寅という少年にはあった。

「なあ、出来るんじゃないか？」

「ああ、若君が帰ってきたんだ。出来るさ、きつとあの人の息子なら風向きを変えてくれる——」

そんな、村人の希望を一身に受けているとは露知らず、寅は林の中の小さな神社の中、賽銭箱の横に腰かけていた。

「帰ってきた気がするな、この古びれた社屋をみると」

「古くて悪かったな、餓鬼」

少年の言葉に反応するかのように、一人だったはずの少年の横に女性が立っていた。

「成りだけは立派になったじゃないか、寅」

「むしろ見た目の変化の方がおまけさ。心と器の方こそでかくなってるんだな。分かるかい？ ソコところ」

「それは分からんが、お主の精神がちつとも成長してないことは確認できたぞ」

「つまり、旅に出る前から俺の精神は完成していた……？」

「違っわ！」

しばらく顔を合わせていなくとも、昨日まで一緒にいたかのように、二人は会話を繰り返す。広げる。

「で、あなたの方こそ変わらないじゃないか、神様よ」

「たかが七年じゃぞ？ 神族からすれば、一日二日と大差ないわ」

「そりゃあすごいな。若作りする必要がない神様だけある」

「お前さん、喧嘩売ってるじゃろ？」

女神が顔を引きつらせるが、寅はまるで神を相手にしてい

るようには見えない様子で、肩を竦めて見せた。

「いやいや、純粹に尊敬しているんだよ。あんたがあんなに凄いい神様だったなんて、旅に出なけりや知ることもなかっただろうさ」

「なんだ、私を知るヤツに会ったのか？」

「おう。ブラド大公とプラネ神と話したときに、あんたのこ  
と知ってるって——」

「プラネじゃと？ 何故あいつの名前が出てくる」

その名はどうやら彼女にとって特別なもののようで、女神は驚愕ともいえる表情を見せた。

「星空を司る最高神様だろ？ そんな方が、あんたとは古い付き合いだって言ってたけど」

「あいつ、今はそんな立場になっていたのか……。学び舎にいた頃は、想像もつかなかったよ」

「あの黒づくめの女神様とは、その時の知り合いってことか。そもそも、神様が学校に通っていることが初耳だけさ」

「人も神も、生まれたときは無知じゃからな。神は力を持っている分、早めに教育しておかないといけない」

「なるほど。空に立つ校舎とは凄いのだろうな。俺は一般的な人の学校に通ったこともないけどさ」

小さな島国で育った彼は、旅先で見た学び舎を思い出しな  
がら言った。

「あいつは単なる友人じゃよ。一応主席争いなんかもしてお  
ったが、正直私もあいつも出世なんぞには興味がない……と

思っていたのじゃがなあ。あいつの趣味と言えませつこま  
しく神通力貯金するぐらいだったし」

「なんかちよつとした偶然でこうなったとは言ってたけどな。休みが欲しいって呻いてた」

「最近になって盛んに行なわれている『星屑祭り』とやらにも関わっているのじゃろうな。あれの管理とか、絶対にやりたくないのう。あの数の星から大地を守りつつ、それを競技に昇華させるとは、全くあれを考えたやつは気が触れておるわ」

今まさしくその友人を馬鹿にしていることを、彼女が知る由もなかった。

「確か、異世界からも人を集めるとか……あ」

寅が、ハツと顔を上げる。とても大事なことに気付いたと  
いうような表情であった。

「ん？ なんじゃ？」

「いや、なんで俺こんな大事なこと忘れてたのか分からないんだが、あの場にもう一人いたんだ。あの人、彼はタビビトと名乗ってて……」

「旅人って、お前さんも旅人じゃろうが」

「いや、そういうことじゃなくてさ。何故だか、顔も思い出  
せないんだ。異世界から来たと言っていたのは覚えているん  
だが……」

寅は、断片のような記憶を頼りに彼の言葉の欠片をなんとか  
絞り出していった。それを聞いて、女神がまた驚いて見せ



る。

「おいおい、召喚による招待客でなく自らの意志で世界を渡るものだと？ そんな存在と会う機会など私だつてないぞ。そんな簡単に忘れるものなのか？」

最もな疑問に対して、寅は首を傾げながら返す。自分で言いながらも、いまいち腑に落ちないというような話し方であった。

「忘れているといふよりは、頭に靄のようなものが掛かっている感じだ。異世界から来たつて聞いた時も、それが当たり前のように思えてあっさり受け入れていてさ」

「そもそもお主、なにがどうしてそんな場に同席を……」

「それを話すと、また長くなるんだが——」

多くの謎を含む話であつたが、二人がそれに対する明確な答えを得ることはなく、そこに現れた少女の叫びが、その場を一方的に中断させる形となつた。

「とおおおらあああああ！」

大声をあげながら、鳥居をくぐる少女。あざみであつた。

「ん？ あれはあざみか。さつき一回会つたけどさ、大きくなつたよなあ。一部分を除いて」

「言つてやるな。本人も相当気にしておるようじゃからな。参りに来たと思えば毎度そのことばかり祈りおつて」

「寅！ こんな所で一人で何をしているのさ」

「何つてお前、無事に帰つてきたことを神様にだな——」

「そんなことより、大変なんだよ！ あいつ等また村まで来

やがつて……」

寅がちらりと後ろに目配りをする、女神は首を横に振つて応えた。

『神が関わる領分ではない』

要は人間同士の問題というわけである。自分が離れていた七年の内に、何かがあつたのだろうと寅は考えた。全ては村に行けば分かる事である。

あざみに手を引かれ、寅は早足で村へと急いだ。

村人たちとの感動の再開劇は、しばしお預けのようである。

続く

五月病は甘え。むしろ自らこう言うこと自体が甘えであり甘えと言うこともまた甘えなのである。では甘えとは何なのか。君がそう問うのも甘えであり、君がそう問うのも甘えだと言うのも甘えだ。漸化式を見てみろ。私はnで君はn+1だ。では1は誰か？まず私と君の関係は全くわからない。それはつまり1が誰か判明しても人と人との関係を一般的に論じることはできないということになる。もし仮に私と君の関係が完全に明らかならば1が明らかになると人と人との関係を一般的に論じることができる。未来は誰にもわからないという観点から二方向分岐点それぞれの可能性は両者とも同様に確からしいとすれば将来的に人と人との関係が一般的に論じることができる可能性は二十五パーセントだ。思考停止の言葉である甘えが紡ぐ可能性を、君も信じてはどうか。以上、T.Kでしたよーん。

## 最低限の光

ふああああああああ時間足りねええええあああああああああ楽しいいいいい出来たあああああこんばんは。鴉和です。毒という考え方はあれは不思議ですよね。腐敗と発酵もそれに然りですね。さあ誰にとつての毒なんでしょうかねえ。

# From Writers

ヒカルです。  
なんかすんませんっした。  
次回は頑張ります。  
でも、出さなかったヤツよりかはマシだ  
と思うんすよ。  
まあ、そんなもんです。  
というわけで、三作目でした。  
もう三人称は書きません。  
来月はすさまじいのを出します。  
SAHIKA始まって以来の1万文字原稿  
をぶん投げます。  
いえいいいえい。  
来月もお楽しみに。  
ヒカルでした。

## From Writers

こんにちは、マウスです。  
今回は落としませんでした。しかも一番ページ数が多いっぽい。といっても大したページでもない。最近、さる僧に奨められたゲームをしています。何か、こう、ヤバいです。  
次は3DS口口ナをプレイしつつ、FEifを待ちながらの執筆ですかね。スペシャルエディションを買えなかった後悔が凄い。